石川達三集

日本文学全集 48

筑摩書房

日本文学全集48　石川達三集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　石川達三

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

石川達三集　目次

蒼氓　五
生きている兵隊　一四〇
神坂四郎の犯罪　二二九
骨肉の倫理　二八四
三代の矜恃　四〇八
自由詩人　四二〇
年譜　四五六
人と文学　中野好夫　四六四

口絵写真撮影　藤原　正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

石川達三集

無色の絵具というものは存在しない　画布の上に無色を求めるならばその部分を切り取るほかはない

[illegible]

蒼　氓

第一部　蒼　氓

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が駈け上って行く。それは殆んど絶え間もなく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当って行き詰ったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後に赤松の丘を負い、右手は贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なるこの丘のうえの是が「国立海外移民収容所」である。

濡れて光る自動車が次から次へと上って来ては停る。停るとぎしぎしに詰っていた車の中から親子一同ぞろりと細雨の中に降り立つ。途惑いして、襟をかき合せて、あたりを見廻す。女房は顔をかしげて亭主の表情を見る。子供はしゅんと鼻水をすゝり上げる。やがて母は二人の子を促し、手を引き、父は大きな行李や風呂敷包みを担ぎあげて、天幕張りの受付にのっそりと近づいて、ヘッとおじぎをする。制服制帽の巡査のような所員は名簿を繰りながら訊ねる。

「誰だね？」

「大泉、進之助でごぜえまし」

「何処だ？」

「ヘッ？」

「どこだ。何県だ？」

「秋田でごぜえまし」

所員は名簿に到着の印をつけて、待合室で待っているようにと命ずる。父は又ヘッとお辞儀をして行李を担ぎなおす。

待合室というのは倉庫であった。それがもう人と荷物とで一杯である。金網張りの窓は小さく、中は人の顔もはっきりしない程に暗く、寒く、湿っぽい。

「此処さ待ってれ」と父は言って、行李を担いで人の中を分けて入って行くと、荷物を置く隙き間を探した。大きな棚が三段になって幾列にも並んでいる。女達はみなこの棚の上に坐っている。男達は荷物に腰かけて煙草を喫っている。妙にしんとして碌々話声もしない。子供達が泣きもしない。憂欝に黙りこくって、用もないのに信玄袋を開けて見たり、手のひらを眺めて見たりしているのだ。

行李を置いて出て来ると大泉さんはほっとして戸口に立

った。ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いている。はてしもない移民の行列だ。ブラジルへ、ブラジルへ！

遠く、港が灰色にかすんで見えている。その向うには海がぼやけている。そしてその海の向うには、外国がある。ついぞ考えて見たこともない外国という事が今は大きな不安になって胸を打つ。すると又しても故郷の山河を思い出す。故郷には傾いた家と、麦の生え揃った上を雪が降り埋めている幾段幾畝の畑と、そして永い苦闘の思い出とがある。しかし、家も売った畑も売った。家財残らず人手に渡して了った。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思いっきりの供物を捧げてお別れをして来たではないか。

「本倉さん、まンだきゃ？」女房が後から問いかけた。ふりかえろうとした時に、恰度受付へやって来た一団の家族を見つけて、おう、いンま来た！　と言った。彼は漸く楽楽とした微笑を浮べ、煙草を喫す事も忘れていたのに気がついて袂に手を入れながら、頑丈な大きな肩に細く光る雨を受けて受付の方へ歩いて行った。女房もやっと遺り場のない気持を和らげられて、十三と五つとの子供達にまで「ほりゃ本倉のおンつぁんが御座った！」と言った。

本倉さんとは杉の叢立ちを隔てゝ隣同士であった。彼は大阪の親戚へ寄ったので一足後れて来たのであった。彼は六人の家族を連れて、てんでに荷物をかついで、倉庫の入口に立つと愕いて言った。

「おンや居だも居だも！　これや一隻の船さみんな乗れッかな？　心細くねくてえかべどもしゃ」

「ンだ」と大泉さんも同感した。それから人々の間を掻き分けて何とか落ちつく場所を見つけると、知らない人達の肩のあいだに挟まって行李や包みの上に腰をかけた。人いきれがむっと臭くて、雨に濡れた着物の蒸れた匂いが鼻をついた。眼の前の棚の二段目には婆さんが坐っていて、鼻水をすゝっては煙管をかちかちと叩いていた。憂欝そうに唇を歪めて煙草を喫った。そしてぼんやりと傍に佇んでいる若者に向って、勝治仁丹持ってだか、と言った。門馬さんの婆さんは風邪をひいているのだ。勝治は隣りの若者に向って、

「孫さ、仁丹ねえか、有ったらけれ」と言った。孫市はまた隣りへ向いて、

「姉しゃん仁丹有ったな。出してけれ」と言った。紡績女工であった頬の赤いお夏は、バスケットの蓋をあけた。

洋服を着た洒落た娘がマンドリンを抱いて立っている。父親の勝田さんは革のスーツケースに腰かけて、襟に毛皮のついたインバネスを着ている。半ば白い髭があって、でっぷりと肥えていて、物知りめいて隣りの中津井さんという熊本の男に話しかけている。

「そりゃあんた日本とは比べものにならん。気候はね、いつでも合服一枚で済むようなえゝ気候だし、土地と言えばもうその肥えて肥えて、桑がね、桑の苗がね、植えてまる

一年で以て、こう！　二寸からの直径になる。わしは一つ養蚕をうんとやるつもりですがね、珈琲はもう生産過剰で行き詰りましたな。将来は果樹及び養蚕、殊に養蚕はえゝですよ。現在では絹物は全部輸入ですからな、えゝ」

元気で喋舌っているのは此の人ばかりで、相手の中津井さんも俯向き勝ちだし、彼の多弁が却ってそのあたりの人人を一種沈欝な不安な気持にさせるのであった。本倉さんは喫い尽した煙草を下駄で踏み消しながら囁く様に言った。

「大丈夫だべな」

「うん」と大泉さんは答えた。それは体格検査の事であった。本倉さんはトラホームであった。そしてブラジル入国の移民の第一条件は（一、トラホーム患者ニ非サルコト）である。患者はサントスの港から一歩も上陸させないでそのまゝ送り返される。これは移民にとって最大の恐怖であった。しかし本倉さんは郷里の予備検査で合格したからこそ来たのである。

「何としても合格せんばならんねな」大泉さんは決心を固めるようにつぶやいて大きな体を行李の上でぎしぎしと置き直した。すると彼の後に居た麦原さんは、土の浸み込んだように黒い皺の寄った顔をふり向けて立ち上った。

「お常、こっちゃ来え」

十五六になる赤い襟の生々しいお常はお下げにした赤い髪を背に垂らして、父の後から人混みを分けて外に出た。外にはまだ銀色の細い雨が烟のように降りつゞいていた。父は鳥打帽を傾けて軒づたいに倉庫の裏に廻って行った。こゝならば誰にも見つかることはない。たゞ軒滴が光りながら並んで落ちて来るだけだ。お常は父が何をするのかを知っていた。だから父の前に立ち止ると眼を閉じ、じっと顔を上に向けて待った。少し蒼白い弱々しい顔にしぶきの様に小さな雨の粒が冷たく落ちた。父は袂からロート眼薬の小瓶を出して、瞼の切れた大きな手で不器用な点眼をしてやった。（何としても合格せんばなんね！）

ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いていた。三ノ宮駅に汽車が着くたび毎に、親子手を引きあい、荷物をかつぎ、ぞろぞろ下りて来るのだ。殆んど大部分の者が始めての自動車と言うものにためらいながら乗るのだ。その車の行列を横切って、灰色に暗い雨空にりんりんとけたゝましい鈴の音を響かせて、号外売りが叫びながら走っていた。ロンドン軍縮会議が恰度真最中である。朝の新聞では軽巡洋艦の艦型制限で議論沸騰し再び委員付託となった事、アメリカは依然として大巡十八隻案を固持していると言う事、而もこの問題をよそにしてイギリスはシンガポール要塞の工事中止声明を裏切って工事費の増額予算を議決した事を知らしている。一方では現職文部大臣小橋一太が越鉄疑獄に連坐して、辞表を出した匆々に起訴拘留された事を報じている。物情騒然として暗澹たる中に、胸を刺すような鋭い号外の音が絶えず移民の自動車の行列を突っ切って走っているのだ。

午前十時、黄色いビルディングの中から騒がしい銅鑼が鳴り響いて来る。すると所員が受付の天幕の中から名簿を持って出て来る。倉庫の入口に立って身動きもならぬほど詰っているお百姓達に向って叫ぶ。

「只今から体格検査がありますから、名を呼ばれた人は家族全部を連れてあちらの建物に行って下さい。順番にです。荷物はそこに置いたまゝで宜しい。いゝですか、もう一ぺん言いますよ。名を呼ばれた人は……」

倉庫の中は急にざわざわとして荷物をまとめて立ち上る用意を始める。所員は北海道から順番に青森、秋田、岩手と呼び上げて行った。呼ばれて倉庫を出た者は女房を促し子供の手を引きながら、細い雨が斜に降る中を黄色い建物までぞろぞろと歩いて行く。入口を入ると暗い長い廊下が真直ぐに伸びていて、その廊下に列を造って待たされる。先頭から順次に名を呼ばれて医務室に入って行く。そこで上半身を裸にさせられて、背と胸とを銀色の小槌で叩かれて、次に瞼の皮を裏返しにめくられて、その二つに合格すると室と寝床との番号札を渡される。それを持って次の室へ行く。そこで当収容所に於ける生活の注意を与えられ、首からぶら下げる様に紐のついたセルロイドのサックに入れた食堂「パス」を貰う。このパスがなくては飯が食えないのだ。

廊下に並んだ人達の間では、雨に濡れた着物から発する悪臭と濡れた女の髪から発する悪臭とがむっと温かくて、暗い片隅に踞まった大泉さんは、(何としても合格せんばなんね！)と本倉さんに言うともなしに言った。すると麦原さんは今一度お常を促して洗面所に行った。そして人の居ない隙をみて又眼薬をしてやった。

「佐藤勝治……妻夏」と係員が大きな声で呼び上げた。お夏は、弟や知らぬ人達の前で妻と呼ばれるのは始めてであった。彼女は伏眼になって勝治の後から医務室に入って帯を解いた。その姉の頬が林檎の様に赤いのを弟は美しいと思った。

「佐藤勝治の母門馬くら。弟門馬義三。……妻の弟佐藤孫市」

孫市は名を呼んでいる所員の前を通る時叱られはせぬかとびくびくしていた。姉のお夏と勝治とは本当の夫婦ではないのだ。友人の門馬勝治を婿にして形式だけ佐藤の籍に入れたのだ。そうして(満五十歳以下ノ夫婦及ビ其ノ家族ニシテ満十二歳以上ノ者)を以て家族を構成しなければ渡航費補助移民の条件に合わないからだ。門馬さんは婆さんと二人の息子、孫市は姉弟。この二組が一緒になって一家族という形式を臨時に作ったのだ。然し是は孫さんの智慧ではない。移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さんが教えてくれた術だ——叱られるどころではなかった。係りのお役人にとっては平凡過ぎる事である。むしろ奨励してもいゝ位だ。そうすれば海外発展の成績は上り国内の人口問題も多少は助かる。海外興業会社にして見れば移民

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が一人でも多ければそれだけ社業殷盛だし、地方代理人山田さんにしても自分の扱った移民については歩合が貰える訳だ。孫市よりもうまいのは物知りの勝田さんだった。彼は移民会社に託して五千円をブラジルに送ってある。そして現に懐中に三千円を持っている。これだけ財産が有っては渡航費補助は貰えない。自費で行くとすれば家族八人二百円ずつで千六百円かゝる。そこで考え出したのが自分の十六になる娘を親戚の青年の嫁に仕立てる事だ。相手の青年は検査前の青二才だからこの男を戸主にして了えば、戸主は無一文だから当然移民になれる。すると勝田さんは妻の父である。勝田一族は妻の母、妻の兄弟という名目で、かくて立派に船賃千六百円をまる儲けした。拓務省をベテンにかけた訳だ。

麦原さんはお常のことが気になった。しかし眼薬の効き目で（当収容所に於て療養すべし）と言うだけでひと先ずパスした。そして本倉さんは「隣りの室で待って居れ」と言って後廻しにされた。

後廻しにされた中に熊本から来た黒川一家があった。夫婦の間に十一を頭に九人の子がある。而もそれだけでは移民家族にならないので親戚の十三になる女の子を入籍して連れて来た。都合十二人だ。最後の子供は生後三カ月である。規則には六月未満の嬰児は許されないのだ。医者はこの子を見た時にはッとした。思わず、これは！　と言った。

「君、ちょっと、見給え！」と彼は隣りに居る医者に言った。

「恐ろしい栄養不良だよ」

この子は蚕の様にぶよぶよで蒼白く透きとおるような肌の下から静脈の網目がすっかり見えていた。凋びて皺の寄った小さな顔、眠るでもなく醒めるでもなく唯ぐったりとしている表情。眼を開く力もなく声を立てゝ泣くことさえも出来ないのだ。

「乳を飲むかい？」と医者は吃り乍ら訊いた。母親は両手にこの子を抱いたまゝぼんやりと窓の外の雨を眺めていて返事もしない。医者は父親をふりかえった。大きな体格をした父は右の手の甲で鼻水をこすってそれを左手で揉み消している。その三人を囲んでうようよと九人の子供だ。その中の三人の女の子は頭に虱が霜の降った程にたかっていて、中の一人は頭一杯の腫物で膿が流れて髪が固まって悪臭を放つ中を虱が歩いている。二人の医者は呆れてこの白痴のような夫婦をつくづくと眺めた。是は人間であるか獣であるか。そして毛むじゃらな熊の様に逞しい本能の姿をまざまざと見たように慄然として顔を見合わした。（郷里の予備検査の医者は何をしていたんだろう？）そして兎も角も後廻しときめた。

体格検査の済んだ者は順々に自分達にあてがわれた室を探して階段を上って行った。四階の第九号室、室は中央に四尺の通路を空けて、あとは両側にびっしりと十二のベッドが床のように連なっている。通路には二つの長椅子と一

つの長い机。大泉さんは此のベッドの上に胡坐をかいて、大きな肩を元気よく聳やかして女房と子供達とを見返った。合格した！　それは愚痴を言いたくなっては押え押えして来た従順な女房にとってもほっとする事だった。（移民になるのは、やんだねは！）彼女は幾度か夫に向ってそう歎息しようとした。しかし今は漸く夫の元気な日に焼けた顔に向って微笑を返すことが出来た。

麦原さんの一家と門馬さんの一家とが同じ室に入っていた。他にベッドが一つだけ空いていた。大泉さんは最初に誰かに話しかけたくなった。彼は善良な明るい顔をして言った。

「お互えに、合格してえかったしなあ！」

「あ、ふんとにえかったしなあ！」と麦原さんが乗りだして来て言った。「おれや、娘がトラホー眼で、ほりゃ心配したし。ンだどもしゃ、此処で療治せばえンだして」

「えかったしな。あんた秋田県でねしか？」

「青森だし。秋田さ近え方だども」

「俺秋田県だし！」今まで鼻唄をうたって行李を片づけていた孫市が言った。

「湯沢だし」

「ほ！　俺あ田沢だし」と大泉さんが一層元気づいて言った。それからはもう打ちとけた話が糸をほぐす様にすらすらと出て来た。それは知識階級の初対面と違って虚栄も探索も警戒も軽蔑も、一切ぬきにした急激な親しみであった。そのうえ皆が同じ目的をもって集まって来たのだ。言わば誰もかれもが日本の生活に絶望して、甦生の地を求めて流れて行こうとする、共同の悲哀を胸に抱いているのだ。それが一層早く皆を親しくさせるのだった。そしてこれ等の友達と親しくなって行くに連れて、この幾日、家財整理や後の始末やら、又は自分が精根を掘り埋めて来た田畑との別れやら旅立ちのごたごた迄、まるで自分が死んで行くかのように重苦しかった心、逡巡し、暗澹とし悄然とした心が、今になって始めて明るく揉みほぐされて行く様に思われて嬉しかった。

たゞ一人、門馬さんの婆さんだけはいつ迄たっても憂欝だった。ベッドの上に皆に背を向けて坐って、ベッドの縁の鉄枠に例の煙管をかちかちと叩きつけては口をへの字に歪めていた。誰も話しかける事も出来ないほど意地悪い様子だった。婆さんは風邪を引いて憂欝である。それよりももっと癪に障るのは勝治が佐藤の籍に入った事だ。

「だからな、ブラジルさ着いたら直ぐに籍は戻すんだ。ンでねば誰も行かれねべ！」

と勝治がいくら言っても駄目なのだ。大体ブラジル三界まで行かねばならないと言うのが、勝治も義三も甲斐性が無いからだと思っていた。尤もこの兄弟は少し頭の足りない方ではあったが。

窓の下を号外の鈴の音が走り過ぎた。雨は一層細かく霧のようになって横に流れている。港は遠く灰色にぼやけて

いる。

「本倉さんの室、どこだしべ？」と女房が言った。大泉さんは、うむ、探して見ッかな、と言って立ち上った。廊下で銅鑼が鳴った。

「何だ？」と頭の足りない義三が言った。

「あれは飯だ」と孫市が言った。「姉しゃん飯食いに行くべ。あの食券持ってな」

「あゝ腹へった。行こ行こ」と麦原さんが女房達を促した。この女房はだらしのない女で、襟が開いて乳房が見えるのも平気だし、寝そべって膝の出るのも何とも思わない女だ。

食堂は一階にある。四階の三十の室からぞろぞろと廊下にあふれ出た移民達は各々の室で友達は出来たし、検査には合格したし皆めっきり明るい顔つきをしていた。口笛を吹く者もあり、階段の欄干を辷る子供もある。食堂の入口に来ると制服の所員が立っていて、一々食堂パスを持っているかどうかを検べている。そこを通って中に入ると、飯と菜との蒸れた臭いがむっと鼻をつく。八人に一つの長い卓を両側から囲んで坐る。同室の者は誰言うとなく一緒に坐るのだった。だが食事は何とはなしに囚人の食事を思わせる。一つの皿に油揚げと菜っ葉の煮つけたのがベタリと叩きつけた様に入れてある。大皿に八人前の沢庵漬がある。八人に一つの飯櫃と茶瓶とそれっきりだ。しかし村で散々貧乏をして来たお百姓には食える。麦原さんも大泉さんも元気に何杯も食べた。

「うまくねなあ」自転車職工であった門馬義三が言った。すると向側から孫市が、「文句は言われねえべ。天皇陛下の御飯でねかよ！」とたしなめる様に言った。

「ンだンだ」と大泉さんも大きく肯いた。

だが金持ちの勝田さんには食えなかった。殊に絹の着物を着たその女房には食えなかった。彼女は夫の耳に口を寄せ眉をしかめて「十五日まで此の御飯じゃ困りますねえ。お金を出しても他の料理は貰えないんでしょうか」と言った。勝田さんは、

「船の御飯はもっとまずいよ。麦飯だからな」と覚悟をきめたように答えた。

食事を終って又四階まで上って行く時に、孫市は物に脅えたように無口でいる姉に言った。

「飯食って直ぐ四階まンで上るのも楽でねえなあ姉しゃん」

お夏は愛する弟の元気な顔を見てそっと微笑むだけであった。彼女は堀川さんの事を思っていた。紡績の女工監督の堀川さん、彼女に結婚の申込みをした男のことを。（若しもあの申込みがもう一カ月早かったならば！）彼の申込みは弟が移民になるのを決心した後のことであった。彼女は当惑して、

「少し待ってたんえ。弟さ訊いて見ねば……」と言って返事を延ばした。けれども、自分が結婚すれば弟の家族構成は崩れる。お夏はその事を遂ぞ弟に言わないでしまった。

この元気な弟、このたった一人の肉親をがっかりさせたくなかったから。そして有耶無耶のうちにこゝまで来て了った。郷里を出るまでは左程に苦しくも思わなかったのに、別れて来てみると、殊に外国へも行くとなってみると、今更慕わしく思い出される。彼女は弟に遅れて階段の欄干を撫でながら考え考え上って行った。

体格検査で後廻しになった黒川一家は合格ときまった。どう考えても不合格に違いないのだが所持金がたった二十円では九州まで帰す訳にも行かない。これで親子十二人が地球の果まで行こうと言うのだ。移民になって了えばブラジルの農園までは、旅費も食費も要らないからいゝ様なものの、不合格にしたら始末に困る。トラホームでないのを幸いに医者は合格の印を捺して了った。(ブラジルへ棄てにやる様なもんだが)と考えて彼は苦笑した。

けれども本倉さんは不合格にされた。彼のトラホームは案外に悪かった。而も戸主である。是が子供のことならば、その為に一家全部が不合格になる事を思って合格にすることも出来るのだが——。医者は気の毒そうな表情をして(あなたは不合格である)旨をやさしく言った。極くやさしく言った。すると本倉さんは眼脂のある赤い眼をあげて医者の顔をまじまじと見た。そして問い返した。何度も何度も問い返した。それから頭を下げて頼んで見た。けれども無駄であった。

「ブラジルから送り返されてもいゝかね? え? それでは余計に辛い思いをするばかりだよ。早く療治して又来るんだね」

本倉さんは悄然として医務室を出ると大泉さんの室を探して四階まで上って来た。大泉さんは飯の後の煙草を喫っていた。彼は本倉さんが入って行くと、おう! と喜んで言った。

「いンま訪ねて行くべと思ってたとこだ。お前の室どこだ?」

本倉さんは微かにほゝえんだ。そして此の友達と別れねばならぬ事に胸が苦しくなった。大泉さんの女房は子供を押しやってその辺りを片づけながら言った。

「さ、こゝさ上ってたんべ。童あ散らかしてばり居で……」

「俺あ不合格だ」と彼は眼をふせて言った。

「なンに?」大泉さんは息を呑むように叫んだ。彼は本倉さんの唇が慄えているのを見た。涙が眼に一杯になって来るのを見た。室の中はしんとして了った。麦原さん、その女房、お常、お夏、門馬兄弟、孫市、誰もが動かなくなって了った。大泉さんは大きな眼をして友達を凝視している中に胸が段々熱くなって来た。彼はむくむくと立ち上るなり煙管を抛り出してベッドの鉄枠を跨いだ。

「こゝさ待ってれ、おンれや懸けあってやっから」

「待ってけれ待ってけれ!」本倉さんは彼の大きな胸に縋るようにして押し返した。

「待ってけれ、お前行ったとて何ともなんね。おれや何ぼ

頭下げで頼んで見たか知んね。ンだどもしゃ、ブラジルから戻されだら何とすッかってな」それから呆然としている友達の女房をかえり見て自分を嘲るように言った。「おかみさん、おれや行かれねくなりましたからなしゃ、どうぞ、御機嫌えくなあ……」

大泉さんは幅の広い肩を慄わせて「いつまでンでもお前と二人で働くべと思ったになあ」と言って泣いた。今朝収容所に着いた時に連れが多いから心細くなくてよいと言ったのは此の男だった。それがいま孤独にされて了ったのだ。

「今からお前、何とする」と彼は言った。

「何ともなんねべや」本倉さんは少し棄鉢に言った。「兎に角一遍帰って見て……」

帰って見たら何があるだろう。生涯帰らないつもりで一切の絆を断ち切って、家も売り田も地主に返したではないか。帰っても何も有る筈がない。郷里の予備検査の医者は大丈夫だと言ったではないか。あいつが嘘をつきゃがった！　だが今それを言って何になろう。帰って見ても何も有りはしない。と言って帰るより他に仕様がないではないか。

大泉さんは日に焼けた頬に光る涙の筋を拭こうともせずに、女房が信玄袋から出して呉れた四合瓶を持って長椅子に坐った。別れの盃だ。これは郷里の思い出の酒「爛漫」である。本倉さんは暗い心のまゝでアルミニウムのコップ酒を受けた。恐らくはもう生涯会うこともあるまい。苦い冷酒の味であった。

やがて大泉さん夫婦に収容所の玄関まで見送られた本倉さんは、妻と五人の子供達を連れて、行李を担い風呂敷包みを提げてぬかるみの坂道を黒い一群の影のように見すぼらしくなって下りて行った。煙のような雨が横に吹き流れていた。彼等の後からフランス人の若い娘が赤いスカアトを見せて、男と腕を組んで、相合傘で歩いて行った。

午後三時、合格して愈々移民となった九百五十三人は、五階にある講堂に呼び集められて、当収容所に於ける一週間の生活の注意を与えられた。それは実に嚙んで含める様なこまごまとした注意であった。女は必らず洋服を作ること、買物は組みになって買えば安いこと、便所は水洗式と言って洗い流す様になっていること、布や綿を流すとパイプが詰ること、絹物はブラジルで高い税を取られるから持って行かない方がいゝこと、等々。

この注意が終って解散すると、早い黄昏がやって来た。収容所の前に並んだ「渡航用品廉売所」を始め見下す街々には灯が点いて、港には船のあかりも点々と見え、はるかに気笛のぼうと鳴る音も聞かれた。鯖の煮た切身が一切れずつついた夕食が終って第一日目の夜が来ると、どの室もどの室も始めてゆったりとした気持になって来た。それはもう十日余りもの緊張と不安とからやっと解放された疲労と安心との喜びであった。大泉さんは生の鰯を取り出して四合瓶の栓をあけて麦原さんや孫市やにすゝめた。

「大分いける方だしな」と麦原さんはアルミニウムのコップ酒を受けながら言った。

「ほう、俺あこれせえ有ればな。……不合格になった友達な、あれとよく一緒に飲んだし」

「毎晩だしか？」郷里の友達に葉書を書きながら孫市が言うと、大泉さんの女房は子供に寝巻を着せながら答えた。

「毎晩だし。風邪ひいて御飯だばくわね時でもこればりあ何ぼでもねは」

この女房はいつも夫の大きな背中の後にかくれている様に、つゝましくしおらしくて、四十幾年の彼女の年齢に柔らかく温められて来た様に気持よく年とっていた。

廊下では子供達が走ったり毬を投げたりしていた。四階の九号室と向いあった十三号室では会津若松から来た三浦さんが、同室の人達に酒をふるまって米山甚句やら、さんさ時雨やらを唄っていた。三階の勝田さんの室では戸主名義になっている青年が花嫁名義の従妹のマンドリンを弾いて、花嫁の兄貴はハモニカを吹いて、金婚マーチの合奏をやった。その間に勝田さんは大島の着物に胡坐をかいて九州人の中津井さんを相手にブラジル講義をやっていた。彼は信州の海外協会支部長をした事のある地主であった。

「どうもこうよく考えて見ると言うと日本の農業はその、何と言うか、行き詰っとる！　どうも私なんかが人に土地を借してやらしとるのが、毎年毎年それが感じられる。而も年毎にどうもそれが切実にな、見えて来るんですな。これじゃあ仕様が無いから一つ今の中に何とか新生面を切り開かにゃならんと思ってなあ、そこでまあ今度ブラジルに土地を買いましてな、アリアンサ植民地と言う所ですがなあ、行って見る様な訳ですがね」

中津井さんは一向に話に乗って来ないでいつ迄も沈んだ顔つきでいる。勝田さんは話に油が乗らない。そこで別の人に話しかけた。

「時にあんたあ、御一人きりですかい」

五十がらみの無精髭を生やした堀内さんは風邪気味の鼻声で、えゝと言った。

「すると、補助単独移民の方ですな」

「へいや、わしあ再渡航ですらぁ」

「おう、そうでしたか」

と勝田さんは掘出しものをした様に元気づいて言った。

「何時お帰りになりました？」

「昨年の十一月ですらあ、ヴェノス・アイレス丸でなあ。その、息子をなあ、やっぱり日本の小学校へ入れてやりてえ思えましてなあ。連れて戻って親戚い預けて行きますんじゃ」

「向うにも良い小学校はあるそうですが？」

「いや、余り感心せんとお見んせえ」

「珈琲園の請負農夫賃銀が下って問題になりましたね、あれはどんなもんです？」

「なあに」相手は憮然とした調子で言った。「働き居る者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com